

デジタル・フォレスト

Digital Forest

2003年4月6日(日) — 5月24日(土)

東京都写真美術館 地下1階 映像展示室

主催＝東京都／東京都写真美術館 企画協力＝NHKエンタープライズ21／サミー株式会社 協力＝日本科学未来館／日本ヒューレット・パカード株式会社
開館時間＝午前10時～午後6時(木・金は夜8時まで／入館は閉館の30分前まで)
休館日＝毎週月曜日(休館日が祝日または振替休日の場合、その翌日、4月28日は開館)
観覧料(2階との共通券)＝一般500(400)円 学生400(320)円 中高生・高齢者(65歳以上)250(200)円 ※〔 〕内は20名以上の団体料金／友の会会員、小学生以下及びお体に障害をお持ちの方とその介護者は無料／第3水曜日は65歳以上無料

猪又健志＋山本努武／タマシュ・ヴァリツキー／サウンドバム・プロジェクト ほか
Takeshi INOMATA＋Tsutomu YAMAMOTO / Tamas WALICZKY / SOUND BUM PROJECT



東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内



当館には専用駐車場はありません。
お車でご来館の際は恵比寿ガーデンプレイス内の駐車場をご利用ください。
<http://www.tpmuseum.com/>
TEL: 03-3280-0099 FAX: 03-3280-0033

デジタル・フォレスト

Digital Forest

東京都写真美術館は、NHKエンタープライズ21ならびにサミー株式会社の企画協力を得て、映像工夫館展「デジタル・フォレスト」を開催いたします。

都市の中で生きる私たちにとって、大いなる自然は本当に遠くなってしまったのでしょうか。本展では、人間の持つ五感にあわせて、多様なデジタル・アートの空間が出現します。木曾川の流木に触れ、切り株の持つ思い出を体験する猪又健志の「Talking Tree」、終わりのない美しい植物の森をさまようT.ヴァリツキーの「Aquarelle 2000」、世界中を旅して見つけた音を体験できるサウンドバム・プロジェクト——これらの作品群に加え、液晶や立体ディスプレイの中に生息する生き物たちを紹介します。本展は、IT化される日常の中で「癒い」や「癒し」を求める私たちの肉体や精神を「視覚・聴覚・触覚」から再考しようという試みです。

東京都写真美術館

サウンドバム・プロジェクト | SOUND BUM PROJECT

「世界の音を聴こう！」2002

展示制作：日本科学未来館 展示デザイン：リビングワールド
協力：バイオニア株式会社／株式会社オーディオテクニカ

ジャングルから街角まで、世界各地へ音を聴きに出かける旅を重ねているサウンド・プロジェクト(川崎義博・岡田晴夫・宮田義明・西村佳哲／1999～)。参加者とともに、世界の豊かさを再発見してきた。2002年秋、日本科学未来館で音の展覧会／サウンドバム・プロジェクト展「世界の音を聴こう！」を、リビングワールドとともに制作。高い評価をうける。

聴く



触れる

猪又健志＋山本努武
Takeshi INOMATA＋
Tsutomu YAMAMOTO

「Talking Tree」2002

猪又はARTEC89グランプリ受賞「音楽の劇場」や「Next Gate II」など音や錯視を印象的に用いた映像インスタレーションで知られ、本作でデジタルコンテングランプリ2002アート部門インスタレーション賞を受賞。
木曾川で採取した切り株に触れると、その木が内包するさまざまなイメージが出現する。



見る

サミー株式会社
NHKエンタープライズ21
Sammy Corporation, NHK ENTERPRISES 21

「液晶の森」

パチスロ機・パチンコ機の液晶モニターが壁一面に群の如く装着された暗室空間。鑑賞者は搭載された高性能グラフィックチップにより描画されるスピーディに極彩色に溢れたCGの洪水を全身に浴びる群れという形態を通してリアルな生物的感觉が想起されゆく。

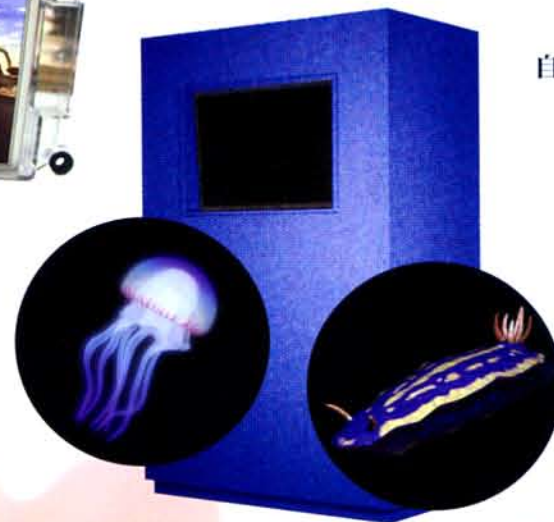
「VRの森」

円面鏡による光学3Dシステム「ボルマトリクス」を利用しさまざまな水棲生物を立体映像で描写するほか、自然の中の生き物をモチーフにしたアニメーションなども投影することによって、バーチャルな感覚を通して生物の世界を再認識する。

タマシュ・ヴァリツキー | Tamas WALICZY

「Aquarelle 2000」2000

画家として活動をスタートし、Ars Electronicaほかで入賞多数。現在はメディアアーティストとして『静的な活動を展開する。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)に客員芸術家として滞在。本作は、どんなに接近していても終わりのない樹の世界が展開される。



自然を探す果てしなき旅

自然ほど厄介なものはない。
なにしろそれは見つめようとすれば消え去り、
掬い上げようとすれば溶け、耳をすましても
聞こえるのは、それが過ぎ去った後の余韻
だけだ。
それ故、我々の先人は自然の残した痕跡で
ある風を神と祀り、光を王とし、響きに至
高を感じた。そうした所作が、やがては宗
教と芸術を生み出し、さらに科学を目覚
めさせた。
現在、我々はいかに自然を情報という形
で理解しようとしている。遠い宇宙の果
てで爆発する星の存在は電波を解析した
結果のCGであり、時の流れは数字で刻ま
れ、あらゆる風景はカメラを通して光の
明滅にデジタル変換され、映像となって伝
えられてゆく。まるですべてが幻であるか
の如く。

自然をリアルな世界として捉えようとすれば
するほど、その姿はバーチャルなものになっ
ていく。このほど展示される「VRの森」「液晶の森」
などが持つ圧倒的にバーチャルな表現の中に鑑賞
者はどのようなリアルな自然を感じるであろうか。
これから先も自然というものを探す旅は終わらない。
今回の作品の試みがその果てしなき旅へのささやかな道
しるべとなれば幸いである。

——丸山昌幸(NHKエンタープライズ21)